

炭の履歴書

題字・イラストレーション 市川興一

52

手嶋龍一

(ジャーナリスト)

生まれ育った北海道 芦別の炭鉱町は種々雑多な人々が出入りする人間動物園だった。



1949 (昭和24) 年、北海道生まれ。慶應大学経済学部卒業後、74年にNHKに入局。97年から2005年までワシントン支局長を務め、2001年の同時多発テロに際しては、昼夜問わずレポートを続けた。2005年に独立し、小説「ウルトラ・ダラー」を発表。外交ジャーナリストとして活躍中。

父は、遠賀川おんかがわの川筋から抜けたような炭鉱主たんこうしゅでした。

それも、近代的経営者からは程遠い昔気質のオーナーだった。僕が物心ついたのは、黒いダイヤが光り輝いて、炭鉱が絶頂にあった時代です。

生まれは、北海道の芦別町(現・芦別市)。明治の時代から石炭の産出地として

一栄えた炭鉱町であった。

父は、筑豊炭田が広がる、遠賀川沿いで中小炭鉱を手がけていました。その後、天草の海底炭鉱や満洲の露天掘りの炭鉱を経営し、終戦間際は輸送船団を率いて北海道に滞在していました。父は刺青こそなかったものの、いまは姿を消してしまった川筋者です。岩

手の水沢出身だった母は、海軍士官と結婚しました。まもなく終戦というとき、釧路港から出港する夫に面会に来たのですが、夫は乗っていた軍艦が撃沈されて戦死してしまふ。幼かった姉を連れ、頼る人もなく困り果てていた母は、列車の中で偶然巡り会った父に窮状を訴えたらしい。これが縁で再婚したのでしよう。

そのころの炭鉱主の家ですから、炭鉱住宅街を見下ろす山の上に建っていました。平屋でしたが、とても広くて、探険し甲斐のある家でした。麓の炭住街も、それは魅力的なところでした。僕は、お手伝いさんたちの目を盗んでは、しばしば家を抜け出して、炭住街を探索したものでした。訳ありと思いき男女の家に上がりこんだことがあります。彼らは酒を飲み交わしながら壺振りをしていました。男の

父の川筋氣質が遺伝していた母はひどく恐れていた

炭で顔を真っ黒にした従業員が家に訪ねてくると、父は必ず床の間を背に座らせて、お酌をしていました。家には、実に奇妙な人たちが出入りしていた。組合運動の過激な活動家から、スト破りを生業にしていた田中清玄や児玉誉士夫といった右翼の大物、戦犯容疑のために都落ちしてきた旧軍の幹部、それに満洲帰りの革新官僚まで、まさしく人間動物園さながらでした。炭鉱で落盤事故が起こったことを知らせるサイレンが鳴り響くと、父は真っ先に飛び出していきました。ふだんは

人が「いいかい、坊っちゃん。この壺から一瞬たりとも目を離しちゃいけないよ」と丁半博打をしてみせる。つれそいの女の人も立て膝で壺を振る。はだけた浴衣の裾からのぞくみごとな緋牡丹の刺青。太ももの彫り物に目を奪われていると、勝負に負けてしまふ。緋牡丹はその仕掛けだったと、幼心に納得しました。そうこうしていると、お手伝いさんたちが「龍ちゃん」と大騒ぎで探しにきたものです。



気丈な母も、「いま坑内に入れば生きて帰れなくなってしまう」と父にすがりついていました。でも、父は母を突き放して真っ先に暗い炭坑に入ってしまった。僕は、いまでも、サイレンの響きが突如聞こえて夜中に目覚めてしまうことがあります。

同じヤマに働く者同士、死なばもろとも、というのが川筋の気風で、経営者だった父は、ヤマの仲間に無限責任を負っていました。後年、とうに父も死んで、うちが零落していたころ、早稲田の学生服を着た青年が「この春、ようや

卒業します。学資を長い間
ありがとうございました」と
挨拶に来ました。自分たちも
不如意なのに、従業員の息子
さんの学校の面倒まで見てい
たのです。炭鉱主というのは
幾度破産しても足りません。

母は、こうした川筋氣質が
僕に遺伝することをひどく怖
れていました。僕も、幼心に
母の気持ちを感じて、行儀よ
く食事をしたり、家で仕立て
てくれた洋服をお仕着せのま
ま身につけたりしていまし
た。つまり、どうでもよいこと
は世の常に従って受け流す。
そのかわり、気が染まないこ
とは一切やらない。学校は嫌
いだからあまり行かず、勉強
もほとんどしませんでした。
小学生になるころ、道央の
空知に引っ越しました。外に
暖房用の石炭が小山のように
積み上げてありました。ある
晩、ゴソゴソと音が聞こえま
した。家族が目覚めると、
父は「この寒さじゃどの家でも
暖をとる石炭がいるんだらう
。そのままに」といった。
朝になると、石炭の山は小さ
くなっていました。

小学校を終えるころに
は、石油に押され、炭鉱経

営は逼迫し始める。ある
日、母が「列車で小樽に行
きます」というので、つい
て行くことにした。

母は、來国俊という名刀を
紫の風呂敷に包んで抱えてい
ました。本物なら国宝級の逸
品でしたが、いまとなつては
その真贋はわかりません。小
雪の舞う中、小樽駅からまっ
すぐに向かった先は、骨董屋
さんでした。ああ、刀をお金に
換えるんだなと感じたあの日
の情景が、当時の寂れた港町、
小樽の家並みとともにくつき
りともみがえってきます。

父が死んだのは中学一年生
のときでした。すでに炭鉱経
営はかなり傾いていました。
川筋者の遺伝形質を引き継い
で、僕が炭鉱経営を担ってい
たら、いったいどんなことにな
っていたか。エネルギー革
命が起きたことを、僕は心か
ら喜んでいるんです(笑)。

中小炭鉱が風前の灯とな
りつつあった一九六五年、
道立岩見沢東高校に進学。

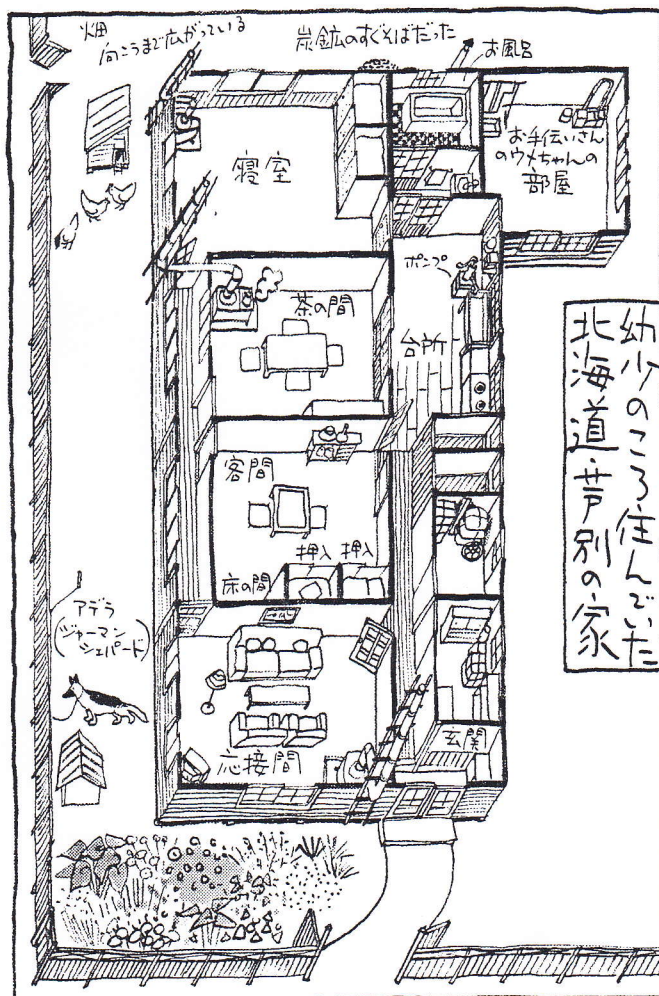
僕の高校には、僧侶や神主
さんが本職という兼業の先生
が多かった。本業が忙しくて

先生も時々学校を休むので
から、生徒が休んでもあまり
咎めだてしない(笑)。大ら
かでした。空知川が流れる
辺りで、よく昼寝しながら本
を読んでいた。受験戦争
とは程遠い環境でした。進
学のときに提出した成績はな
ぜか良かったんです。いまだ
は考えられないことですが、
先生たちが下駄を履かせてく
れたんでしょう。こんなこと
打ち明けていいのかな(笑)。

鎌倉に移り住み、慶應義
塾大学経済学部に進学する。

子どものころは鎌倉の極楽
寺に別荘があったんですが、
このとき母と一緒に住んだの
は大町の借家でした。いまだ
に僕は、家を建てたりして、
わが生涯の拠り所にするとい
う感覚がひどく稀薄です。
入学手続きはしたものの、
大学に通った記憶さえありま
せん。落ちぶれたりとはいえ、

従業員をたくさん抱えていま
したので、経営に携わってい
ました。海外の鉱山の経営に
も乗り出していました。いよ
いよ資金繰りも難しくなっ
て、会社を畳むことになつて
しまった。でも、起業は易く、
倒産は難し。会社は、畳むと
きほど資金が要るものです。
第一次オイルショック直前
の一九七二、三年ごろ、無配
に転落した紙くず同然の炭鉱
株が家でお蔵入りになってい





ました。当時は過剰流動性と
いわれる金あまりの時代で
す。投機筋の資金がボロ株に
流れ込んで、額面割れをして
いた炭鉱株がするする値上が
りしていきます。そこで、こ
のボロ株を売り払って、どん
どんキャッシュに換えていく
うちに、母が「最後の大勝負
ね。石油株一本でいくわ」と
いいだしたんです。彼女も、
父に劣らず、かなりのヤマ師
だった（笑）。「石炭は石油に
よってつぶされた」という母
の見立てによって、当時はま
ったく値動きがなかったアラ
ビア石油株にすべてつぎ込む
ことに決めました。

仕込み終わって二週間ほど
すると、突如、アラビア石油
株が動き始めて、大相場がや
ってきました。連日のストッ
プ高でした。鎌倉から横須賀
線に乗って、兜町の証券会社
に通いました。最後は天井近
くで売りぬけて、さっと手仕
舞いにしました。山のような

キャッシュが残りしました。

いくらぐらいですか、と
訊ねると、「まあ、数億とい
うところですよ」とさりと
いい、「でも、会社の整理に
充てましたし、ぱっと使え
ばすぐなくなりますよ」と
いたずらっぽく微笑んだ。

会社の整理が一段落する

ワシントンでは、取材の主戦場は自宅。 取材費が目飛び出るほどだった

一七四年、NHKに入局。

新人研修を受けてみると、
実にのんびりした世界でした。

巨大組織はシャバと比べてず
いぶん落差がある。とにかく
過酷な実業の世界と縁が切れ
て安堵しました。お金はあっ
たし、一、二年でおさらばし
ようと考えていましたから。

最初は郷里の北海道に赴任
しました。剛毅な母が「あぶ
く銭はどんな使いなさい」と
と勧めるので、しばしば東京
に舞い戻って、黒いダイヤの
時代に父がお世話になったお
座敷でお姐さん方に行儀作法
を教わったりしました。祇園
の女将はずいぶん厳しかった。
母は、意識のうへでは晩年

と、実に身軽になりました。
実業というのは本当に大変だ
と身に沁みただけで、虚業で楽
な仕事はないかな、と考えた
んです（笑）。そのころ、横
須賀線の中で、BBC、イギ
リス放送協会の二重スパイが
主役を務めるというスパイ小
説を読んで、ふとひらめいた
んです。日本には日本放送協
会がある、と（笑）。



まで炭鉱主の妻だったのかも
しれません。ついに、ふつう
の市民の金銭感覚に戻ることは
ありませんでした。亡くな
る直前に慶應病院に入院した
ときも、お見舞いに来てくれ
た人たちに、ご祝儀袋を渡し
ていたくらいです（笑）。

次の赴任先は横浜放送局で
す。希望してアメリカ海軍の
拠点があつた横須賀に赴任さ
せてもらいました。配置は僕
一人。以後、定員一人の支局ば
かりを希望しました。一人が
性に合っているのでしょうか。

戦艦三笠が保存されている
三笠公園の近くに住みました。
基地の町横須賀は、炭鉱町と
実によく似ているんです。人
それぞれに事情を抱えている

から、お互いにいたわり合っ
て、横のつながりが強い。ドブ
板通りには魅力的な人たちが
肩を寄せ合って暮らしていま
した。外人バーのマスター、シ
ュー・シャン・ボーイと呼ば
れた靴磨き、黒人バーのホス
テスさん、その一人ひとりの
顔をはつきりと思い出せます。

その後、政治部に異動し、
首相官邸などを担当する。

東京では湯島に住みました。
天神様とラブホテルが隣りあ
った町並みがなんともいい味
を出していました。退屈した
ことがありませんでした。

NHKのディレクターだっ
た妻と結婚して、赤坂の檜町
公園の向かいにあるマンショ
ンに移りました。檜町公園は、
ことし三月にオープンした東
京ミッドタウンの一部になっ
ていますね。この間、妻と一
緒に出かけてみたら、すっか
り様変わりしていました。

八七年、特派員としてワ
シントン支局に赴任。湾岸
戦争前後のアメリカでの取
材をもとに執筆したノンフ
ィクション『ニッポンF5
Xを撃て』一九九一年

日本の敗北』を発表する。
この著作が注目され、九四
年、ハーバード大学の国際
問題研究所に招聘された。

ボストン郊外のサマービル
という町で暮らしました。ち
っちゃい家だったんですが、
ダイニング兼リビングが吹き
抜けになっていて、陽当たり
も素晴らしい。すぐく居心地
がよく、いままで住んだなか
で、最も住みいい家でした。
妻も「私が設計するならあの
ような家」といっています。

ハーバード大学の国際問題
研究所には世界から十六人の
フェローが招聘されていまし
た。いまの韓国の外交通商部
長官、つまり外務大臣の宋旻
淳さんもそのひとりでした。
兄弟のように親しい仲です。
そのほか、コロンビアやベネ
ズエラの国防大臣、のちにス
リランカの大臣になった人と、
多士済々です。毎日のように
誰かの家に集まっていた。

ハーバードでの日々は、僕
の人生にとってかけがえのな
いものでした。素晴らしい仲
間たちを得て、知的な刺激も
人脈も得ることができました。
ボストンからドイツに赴任
して、ボン支局長になりました

た。森の麓のペヒという村にある家に住みました。

その後、九七年から〇五年までの八年間、ワシントン支局長を務める。9・11テロ事件の際は、十一日間連続で昼夜中継を担当した。

首都ワシントンDCは、本格的には黒人の町です。その多くは、残念ながら治安がよくない一帯です。だから、どうしてもメリーランド州の郊外住宅地に住まざるをえない。僕らは、ベセスダという市内から車で二十分ほどの閑静な住宅地に住みました。周りの住人はユダヤ系の弁護士や医者ばかり。公立学校のレベルと家賃が運動していました。

政治都市でありインテリジェンス都市であるワシントンでは、取材の主戦場は自宅なのです。僕がレストランで国防総省の高官と会食した三日後に、国防関係のスクープを放ったとします。ニュースと高官が無関係だったとしても、情報源と類推されてしまう危険がある。だから、レストランで難しい取材するのはご法度です。やはり自宅に招き、招かれ、人間関係を深

めていくほかはない。

まず、くつろぎながら食前酒を飲むリビング。ついでダイニング・ルームで食事をする。食後には次の間に移って、コーヒーや食後酒を飲んで語らう。庭やベランダに出て談笑もする。当然、料理を準備するキッチンも、お客に泊まってもらうゲストルームも欠かせません。これらはゲスト用のスペースですから、夫婦の寝室や書斎、子ども部屋なども別に必要となります。ピュッフェ・スタイルのパーティーでは、かなりのお客を招きますから、それなりの駐車スペースもなければなりません。こうした、いわば取材用の家を構えれば、家賃も相当な額になると覚悟しなければなりません。NHKの規定の額には到底収まりません。足りない分は持ち出します。ちょっと信じていただけないかもしれませんが、僕はワシントン支局長を八年していたので、その間に自前で出した住宅費は目玉が飛び出るほどです。ワシントンでは、長くいればいるほど、仕事をすればするほど、家族に迷惑と負担がかかる。一特派員と、責任者たる支局長とは、招く相手

も違うし、物入りという点でも比べものになりません。家族には本当に申し訳なく思っています。

「一、二年でおさらばしようと考えていた」NHKでの勤務は、その大半を海外で過ごしながら、三十一年にわたった。〇五年六月、五十五歳にして独立する。

ジャーナリストになった動機は不純でしたが、ひとたび獣道に踏み込んでしまうと、後戻りは難しい(笑)。情報の世界を極め始めると、なかなか奥が深いものなのです。

いまは、白金のマンションに暮らしています。夫婦二人で生活するだけですから、こぢんまりとしたところです。

ディープリンパクトの生産者、北海道のノーザンファーム代表の吉田勝己さんは、長年の大親友です。牧場には見晴らしがよい場所がそこかしこあって、そのひとつに僕の執筆スペースをつくってくれました。一年の五分の一はそこへ行って原稿を書いています。いずれはノーザンファームに家を建てたいなあ。

(取材・構成 樽谷哲也)